

## トモによる逆接条件表現

江 原 由美子

### 1 はじめに

接続助詞トモはいわゆる逆接仮定条件を表すとされているが<sup>\*</sup>、仮定的な事態だけではなく、事実を述べる場合にも用いられることがある。先行研究では、(1)(2)のような例が事実を述べる場合に用いられているものとして指摘されている。

- (1) 楽浪の志賀の<sup>一には「比良の」といふ</sup>大わだ淀むとも (與杼六友) 昔の人にまたも逢はめやも<sup>一には「逢はむと思へや」といふ</sup>  
(万葉・巻一31)

- (2) 梅の花に、雪の降れるを、よめる 小野篁朝臣

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人のしるべく (古今・巻六335)

佐伯梅友(1936)は、(1)を「志賀の大わだは淀んでゐるが、たとへそのやうに淀んでゐても」と解し、このような事実を述べる場合に仮定表現が用いられているものを「修辭的假定」と名付けた。また、湯澤幸吉郎(1936)は、(2)を「梅花の色が實際は見えるが(又は、それが雪に紛れて見えぬか否か不明だが)、假りに「見えず」と定めたのではなく、現實に花・雪の區別のつかない事を表したものである」として、「現代口語に譯すと「見えないけれども」「見えぬが」などに當る」としている。

トモが事実を述べる場合にも用いられるということ、すなわちトモが修辭的假定を表すということは、佐伯梅友(1936)以降、定説となっている。佐伯梅友(1936)以降の先行研究では、この用法は、「既定の事実を仮設した表現にして、表現主体の情緒を強調した」もの(林巨樹(1959))、「既定の事実として存在する言語素材を、仮定の事実として想定する対象規定の方法」(塚原鉄雄(1967))というように説明されている。

しかし、この事実を述べる場合に用いられるトモをめぐることは、事実を述べる場合には確定条件の形式があるのに、仮定を表す形式がなぜ用いられるのか、といった問題がある。このことに関して、先行研究では、「仮定」のあり方から解決が試みられている。例えば山口堯二(1980)は、次のように述べている(棒線は執筆者)。

事実が仮定条件として表現される、という場合の「事実」は、仮定条件法—仮定条件表現との関係からいえば、表現の素材にすぎない。仮定の場合に限らず、どんな表現形式に関しても素材のあり方のみによって自動的に一つの形式が採択されるというような考え方は認めたいが、とりわけ仮定条件法の形式については、その性格上、無理がある。仮定条件法は、

条件になる事柄を、成立可能な、ありうる事態として取り上げるという性格を一般にそなえている。いわば可能性の表現形式といえよう。したがって、もともと確定条件法のように与えられた現実に即して事柄を捉える傾向をもたない。むしろ現実を離れてこそ成り立つという性格をそなえている。仮定条件表現が、未来・未知の事柄は言うに及ばず、非現実の事柄まで条件として表現できるのもそのためである。与えられた現実が仮定条件として取り上げられることがあるのも、やはり現実を離れて事柄を捉えるという同じ性格によることと考えてよい。 (p90)

しかし、「現実を離れて事柄を捉える」という仮定条件の性格と、トモの形態や構文的な特徴が関連づけられておらず、なぜそのような性格がトモに見られるのかという疑問が残る。

また塚原鉄雄（1967）は、トモの構文について「後件Bの実現に、確実性の欠如もしくは稀薄な場合を、前件Aとして仮定し、それを条件としても、後件Bが実現するという表現構造なのである。——そこに、言語主体の強烈な自己主張が認知される。」と述べ、「そうした逆接仮定条件法の強烈な自己主張が根柢となって、修辭的仮定という用法が派生する」としている。しかし、「逆接仮定条件法の強烈な自己主張」と「修辭的仮定」がどのようにつながるのかは、明らかにされていない。

このように、トモが修辭的仮定を表すということについて、「仮定」というものを明らかにすることから解決を図ることも一つの方法ではあるが、それがトモの現象面の特徴とどう関係するかということを考えなければ、説明として不十分ではないかと思われる。そこで本稿では、この問題について、接続助詞トモが担う機能やトモの構文に見られる現象面での特徴を詳細に記述することから、解決を図りたい。なお本稿では、平安初・中期の和文作品を対象とし、主として散文の用例から考察を進める<sup>\*2</sup>。

## 2 先行研究

トモは条件表現の体系において、「逆接仮定条件」を担うものとされている。例えば、松下大三郎（1928）では「放任格」（いわゆる逆接条件表現に当たるもの）の「未然假定」を担うものとされ<sup>\*3</sup>、阪倉篤義（1975）では「逆接」の「仮定条件」<sup>\*4</sup>、小林賢次（1996）では「逆接条件」の「仮定条件」を担うものとされている。

トモの意味・用法を記述した先行研究には、湯澤幸吉郎（1936）、塚原鉄雄（1958）（1967）、林巨樹（1959）、此島正年（1966）、飛田良文（1970）、西田直敏（1971）、阿部八郎（1985）、糸井通浩（2001）などが見られる。これらはすべて、トモの意味・用法として次の二点を指摘している。

- （I）前件でまだ起こっていない事態を仮定し、後件ではそれに拘束されずにある事態が起こることを示す。

(Ⅱ) 前件ですでに起こっている事態を仮定の事実と想定し、後件ではそれに拘束されずにある事態が起こることを強調する。

(Ⅰ) がいわゆる逆接仮定条件で、(Ⅱ) が事実を述べる確定条件に近い用法(修辭的仮定)である。

また、山口堯二(1980)は、「条件として表現される事柄の実現性に対する、主体の判断・意識のあり方を基準にして」(p100)、仮定表現に次の四種の類型を立てている。氏は、トモによる逆接仮定条件だけではなく、接続助詞バによるいわゆる順接仮定条件も含めた仮定表現全般を対象としており、それぞれの類型が、順接仮定条件と逆接仮定条件の両方に見出されることを述べている。なお、四種の類型のうち「現実仮定」が、他の先行研究における「修辭的仮定」と重なるものである\*5。

疑問仮定——実現性の有無について判断ができず、疑問をいだく事柄を条件とする仮定

現実仮定——すでに実現している、または、やがて実現するだろう、と肯定的に判断される現実的な事柄を条件とする仮定

非現実仮定——既成の現実に反する、または、実現性がない、と否定的に判断される非現実的な事柄を条件とする仮定

一般仮定——具体的な実現性を問題にせず、ただありうることとして一般的に考えられる事柄を条件とする仮定

以上のように先行研究では、条件表現体系における位置づけや、意味・用法の分類が考えられている。しかし、トモが担う根本的な機能が何であるか、言い換えれば、トモが表す逆接仮定条件とはどのようなものかについては、まだ考える余地があるのではないと思われる。そこで本稿ではまず、次の3節でトモが担う根本的な機能について考える。そして、4節で構文上の特徴からトモが修辭的仮定を表すことについて考察し、5節でトモといわゆる逆接確定条件を表すトモの差異について考察を加えることにする。

### 3 トモの機能

#### 3.1 前件と後件の論理関係\*6

次の(3)は、人々が自分を迎えに来る月の都の人と戦う準備をしていることを聞き知ったかぐや姫の発話である。aのトモ文では、前件の「守り戦ふべき下組み(=準備)をしたり」という事態からは、普通「戦うことができる」「月の都の人を倒すことができる」といった事態が期待される。しかし、後件では、その期待に反する事態「あの国の人をえ戦はぬ」が述べられている。bのトモ文でも、前件の「かくさし籠めてあり(=門や戸を固く閉ざしている)」からは「門や戸が開くことはない」という事態が期待されるが、後件ではそれに反する「みな開きなむとす」という事態が述べられている。またcのトモ文でも、前件の「会ひ戦はんとす」から期待

される事態に反する「猛き心つかふ人も、よもあらじ」という事態が後件で述べられている。

- (3) これを聞いて、かぐや姫は、「(a) さし籠めて、守り戦ふべき下組みをしたりとも、あの国の人をえ戦はぬ也。弓矢して射られじ。(b) かくさし籠めてありとも、かの国の人來ば、みな開きなむとす。(c) 会ひ戦はんとすとも、かの国の人來なば、猛き心つかふ人も、よもあらじ」(竹取)

上の三つのトモ文では、前件の事態から期待される事態が生起せず、期待に反する事態が発生することが述べられている。前件の事態からは、一般常識や話し手の知識・経験などに基づいて、話し手が「こうあるべきだ」と期待し推論する事態の展開（以下、「通常の推論過程」と呼ぶ）がある。しかし、実際に生起する事態はその推論過程に反するものであり、それがトモ文の後件となっている。トモの前件の事態をP、前件から期待される事態をQとすると、通常の推論過程は $P \rightarrow Q$ と表せる。 $P \rightarrow Q$ は、Pという事態からは通常Qという事態の生起が期待される、という意味である。また、前件から期待される事態に反する事態は $\overline{Q}$ と表せる。これを用いてトモ文の論理関係を示すと、次のようになる。

(4)  $P \text{ トモ } \overline{Q}$

ところで、上の(3)の例において、aとbのトモ文の前件「守り戦ふべき下組みをしたり」「かくさし籠めてあり」は、発話時においてすでに実現し持続している事態であり、cのトモ文の前件「会ひ戦はんとす」は、まだ実現していない仮定的な事態である。先行研究の多くでは、前件がまだ起こっていない事態、すなわち未実現の仮定的な事態か、前件がすでに起こっている事態、すなわち実現済の事態かで別の用法を立てており、前者が一般的な逆接仮定条件、後者が修辭的仮定とされている。その分類にならうと、aとbのトモ文は前件が実現済の事態であるので修辭的仮定、cのトモ文は前件の事態が未実現の仮定的な事態であるので一般的な逆接仮定条件となる。しかし、三つのトモ文において見られる前件と後件の論理関係は、通常の推論過程に反する事態の展開という点では同じであり、一般的な逆接仮定条件を示すcと修辭的仮定を示すa・bとで異なる点は見られない。

### 3.2 トモ文の含意

トモ文には、前件から期待される事態に反する事態が後件であるという論理関係がある。しかし、トモ文で提示されている論理関係はそれだけではないように思われる。トモ文では、前件の事態を前提としない場合にも、期待に反する事態である後件の生起を考えることができる。次の(5)は、光源氏が末摘花に会う手引きを大輔命婦に懇願している場面である。前件の「かの(＝末摘花の)御ゆるしなく」という事態からは、「話ができるように取り計らうことはできない」という事態が期待されるが、源氏はそれに反する「たばかり(＝話ができるよう取り計らう)」ことを懇願している。この例では、「御ゆるし」がない場合のことが示されているが、「御ゆるし」

がある場合はもちろんのこと「たばかれかし」であると考えられる。つまり源氏は、末摘花の「御ゆるし」があってもなくても、「たばかれかし」と懇願しているのである。

- (5) なにやかやと世づける筋ならで、その荒れたる簀子にたゞずままほしきなり。いとうたて心得ぬ心ちするを、かの御ゆるしなくともたばかれかし。心いられし、うたてあるもてなしにはよもあらじ」など語らひ給ふ。(源氏・末摘花)

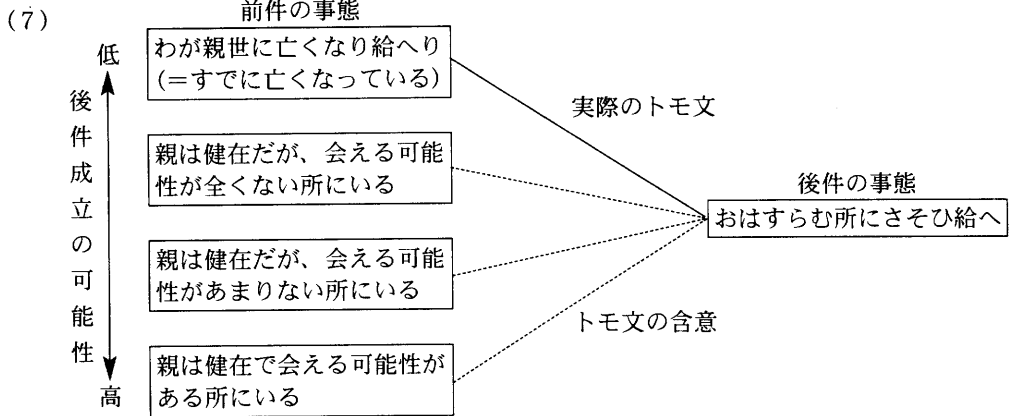
先行研究でもこのことは注目されており、山口堯二(1980)は、「人は問ふともその名は告らじ。」において、人が問う場合だけではなく、問わない場合も「その名は告らじ」であることを挙げている。そして、逆接仮定条件法では「条件が成立しなくても帰結は解消せず、逆に条件の成立しない場合もむしろ当然のこととしてその帰結が承認される」とし、「条件の成立する場合と、しない場合とをあわせて帰結の成立を保証しているのが「とも」の「も」であると考えることができよう」と述べている(p93)。また、塚原鉄雄(1967)は、「後件Bの実現する条件として、前件Aには、論理的な順当性に欠如する。そういった前件Aを特別に想定し、そういった前件を条件としても、後件Bが実現するとする構文である。したがって、その根柢には、前件Aの欠如する場合には、当然のこととして、後件Bが実現するとする、鞏固な確信が察知されよう。」と述べている。

しかし、トモ文で提示されているのは、前件が前提となる場合、つまりは「条件の成立する場合」と、前件とは正反対の事態が前提となる場合、つまりは「条件の成立しない場合」ばかりではないように思われる。また、先にも述べたようにトモの前件と後件には論理関係が見出されるのであるから、「前件Aの欠如する場合」にその論理関係がどうなるのか考える必要があると思われる。次の例を見られたい。これは、夕顔の遺児である玉鬘が、行方知れずの母・夕顔との再会を長谷寺で祈願している場面の例である。

- (6) いかなる罪深き身にて、かゝる世にさすらふらむ、わが親世に亡くなり給へりとも、我をあはれとおぼさば、おはすらむ所にさそひ給へ、もし世におはせば御顔見せ給へ、と仏を念じつゝ、ありけむさまをだにおぼえねば、たゞ親おはせましかばとばかりのかなしさを、嘆きわたり給へるに、(源氏・玉鬘)

上の例では、「わが親世に亡くなり給へり」という事態であっても、「おはすらむ所にさそひ給へ」という事態が成立することが期待されており、「わが親世に亡くなり給へり」という事態でない場合、つまりは「親は健在で会える可能性がある所にいる」場合はもちろんのこと、「おはすらむ所にさそひ給へ」だと考えられる。前件の「わが親世に亡くなり給へり」という事態とその逆である「親は健在で会える可能性がある所にいる」という事態の間には、「親は健在だが、異国の地など会える可能性が全くない所にいる」や「親は健在だが、身分の差などを考えると会える可能性があまりない所にいる」など種々の事態を想定できるが、それらすべての事態において「おはすらむ所にさそひ給へ」が成り立つと考えることができる。ここで、もともとの前件であ

る「わが親世に亡くなり給へり」について考えると、この事態は想定可能な様々な事態の中で、最も後件を成立させる可能性が低いものであると言える。



後件を成立させる可能性が最も低い事態が前件となっているということは、先に挙げた例においても言えることである。例えば(5)では、末摘花に光源氏のことを話した場合、「末摘花のお許しがない」「許すか否か末摘花から明言がない」「条件付きで末摘花のお許しが出る」「末摘花のお許しが出る」といった事態が想定できるが、その中で後件の「たばかり」が成立する可能性が最も低くなるのが、前件の「かの御ゆるしなく(＝末摘花のお許しがない)」という事態である。また、(3)においても、後件の「あの国の人をえ戦はぬ」「みな開きなむとす」「猛き心つかふ人も、よもあらじ」が成立する可能性が最も低くなる事態が、前件の「守り戦ふべき下組みをしたり」「かくさし籠めてあり」「会ひ戦はんとす」であり、このことは一般的な逆接仮定条件のトモ文にも修辭的仮定のトモ文にも同じように見られることだと言える。

このように、トモの前件は後件の事態を成立させる可能性が最も低い事態である。トモ文には前件と後件の論理関係だけではなく、前件に示されている事態以外の事態(極端には前件の事態と正反対の事態)と後件の事態との論理関係も見出すことができる。これは、言い換えれば、トモ文はトモ節に示された事態以外の事態であっても後件の事態が成立するという含意を有している、ということである\*7。

#### (8) $P \text{トモ} \overline{Q}$ の含意

$\overline{Q}$  が成立する可能性が  $P_1 < P_2 < P_3 < \dots < P_{n-1} < P_n$  となる  $P_1, P_2, P_3, \dots, P_{n-1}, P_n$  のどの  $P_x$  においても、 $P \text{トモ} \overline{Q}$  が成立する。ただし、言語化される  $P$  は、 $\overline{Q}$  が成立する可能性が最も低い  $P_1$  であり、 $P_n$  は  $P_1$  と正反対の事態である。

トモを用いると含意が生じるのは、モの働きによる。モは「同類のものが他にあることを前提として主題を提示する」(細川英雄(1985))機能を有しており、その累加の性質がトモにも受け継がれているのだと考えられる。トモ節には(9)(10)のような全称的な表現が見られることがあるが、これもモに累加の性質が残っているためだと思われる\*8。トモ文では、後件が成立

する可能性が最も低くなる前件を言語化することによって、どのような前件においても後件が生起することが含意されるが、前件として想定できる事態の間で後件が成立する可能性の高低が見られない場合は、このように全称的な表現が用いられることとなるのではないだろうか。

- (9) 「身づからは、かく心うき宿世、いまは見はてつれば、この世に跡とむべきにもあらず、  
ともかくもさすらへなん。生い先とをうて、さすがに散りぼひ給はんありさまものの、  
かなしうもあべいかな。姫君は、となるともかうなるとも、をのれに添ひ給へ。

(源氏・真木柱)

- (10) 「いとあさはかなる人々の嘆きにも侍なるかな。まことに、いかなりともとのどかに思  
給へつるほどは、をのづから御目離るゝおりも侍つらむを、中／いまは何を頼みにて  
かは怠り侍らん。いま御覧じてむ」(源氏・葵)

#### 4 トモと話し手の判断

##### 4.1 前接語から見た前件の特徴

トモは活用語の終止形（形容詞型活用語には連用形、打消の助動詞ヅにはズの形）に接続する<sup>\*9</sup>。対象とした平安初・中期の和文作品におけるトモの前接語を調べると表1のようになる。

表1

動詞	補助動詞	形容詞	形容動詞	助動詞										計
				ヴォイス		アスペクト・テンス				打消		推量		断定
				ル	タリ	リ	ツ	ヌ	キ	ズ	ム	ベシ	ナリ	
159	22	43	4	4	9	7	3	9	1	46	1	2	25	335

前接語で注目されるのは、過去のテンスを表す助動詞キや、未来のことを述べる際に用いられる推量の助動詞といった、時間に関わる表現の前接が少ないことである<sup>\*10</sup>。助動詞キが前接する1例は(11)で、キがアスペクトを表す助動詞ツと複合してテキとなっており、厳密には過去のテンスが前接する例とは言えない。また、(12)は助動詞ムが前接する例であるが、トモが一語化した接続助詞とも一語化していない引用助詞ト+係助詞モとも取れ、不安定である。

- (11) かよふべきみちにもあらぬやつはしをふみみてきとん<sup>(6)</sup>なにたのむらん(蜻蛉・下)

- (12) 「たゞ御心になむ。おとゞに知らせたてまつらむとも、たれかは伝へほのめかし給はむ。

(源氏・玉鬘)

ところで、同じ時間に関わる形式でも、アスペクトを表す助動詞タリ・リ・ツ・ヌの前接には制限が見られない。タリ・リは「変化の結果の状態、およびその派生的意味としての単純状態」や「動作の完成と結果の存在」、ツは「動作の完成」、ヌは「変化の完成」というアスペクトを表すとされている(鈴木泰(1999))が、それらがトモに前接した例では、前件が(13)～(16)のように未実現の事態であることが多い。これらの例では、話し手が前件の事態を未来のある時

点において完成されるものとみなし、その前件の事態が完成された状態において、期待に反する後件の事態の生起が考えられることが述べられている。話し手にとっては、その事態が未来のある時点で成立すると発話時においてみなしうることが重要であり、その事態が実現性の高いものか否かは問題とされていない。

- (13) 石作の皇子は、心の支度ある人にて、「天竺に二となき鉢を、百千万里の程行きたりとも、いかでか取るべき」と思ひて、かぐや姫のもとには、「今日なん、天竺へ石の鉢取りにまかる」と聞かせて、(竹取)
- (14) その歌、詠める文字、三十文字あまり七文字。(中略) 真似べども、え真似ばず。書けりとも、え読み据ゑ難かるべし。(土佐)
- (15) なにがし命侍らむほどは、頂に捧げたてまつりてん。心もとなく何を飽かぬとかおぼすべき。たとひあへずして仕うまつりさしつとも、残りの宝物、両じ侍所々、一つにてもまた取り争ふべき人なし。(源氏・東屋)
- (16) 昔、おとこ、あづまへ行きけるに、友だちどもに、道よりいひをこせける。 忘るなよほどは雲みになりぬとも空ゆく月のめぐり逢ふまで (伊勢・十一段)

同じ時間に関わる表現でも、過去のテンスを表す助動詞キや未来のことを表す推量の助動詞が前接せず、タリ・リ・ツ・ヌといったアスペクトを表す助動詞が前接しうるのは、話し手が発話時において前件の事態の成立をみなしうかがトモにとって重要であるからではないかと思われる。助動詞キによって表されるのは、発話時にその影響が及ばない、過去のある時点において成立した事態であり、推量の助動詞によって表されるのは、発話時には成立しておらず、未来のある時点において成立する可能性がある事態である。どちらも発話時において話し手が事態の成立をみなしうということを積極的には表し得ず、その点でトモに前接するアスペクトを表す助動詞とは異なっているのである。

また表1から、トモには形容詞や打消の助動詞ズ、断定の助動詞ナリといった状態性述語の前接が多いことが分かる。動詞が前接する場合も、「あり」(33例)、「おはします」(2例)、「おはす」(4例)、「侍り」(6例)といった状態動詞の前接が多く見られる。状態性述語は発話時においてある状態や存在が持続していることを示すので、それらを述部にとると、その事態は実現済の事態となる。状態性述語がトモに前接するとき、トモの前件は、話し手にとって確認済の事実である場合と、話し手にとっては未確認であるが、得ている情報から事実と考えられる事態である場合がある。次の(17)は、源氏が上達部である夕霧と柏木に蹴鞠に加わるように言っている場面であり、二人が「上達部なり」という状態にあることは話し手には確認済の事実である。(18)は前斎宮への源氏の発話であり、「かたじけなく」は発話時における源氏の心境であって、これも話し手にとって確認済の事実であると言える。また、(19)の「いみじきかたわあり」は話し手にとっては噂から得た情報であり、未確認の事態である。(20)も、「竜の頸の玉」を取



ることが「難き事なり」であるかどうかは話し手にとっては未経験であり、未確認の事態である。

- (17) 太政大臣の君たち、頭弁、兵衛佐、大夫の君など、過ぎしたるも又かたなりなるも、さま\ / 人によりまさりてのみものし給。やう\ / 暮れかゝるに、風吹かずかしこき日なりとけうじて、弁の君もえしづめずたちまじれば、おとゞ、「弁官もえおさめあへざめるを、上達部なりとも、若き衛府司たちはなどか乱れ給はざらむ。かばかりの齢にては、あやしく見過ぐす、口惜くおぼえしわざなり。さるは、いと軽\ / なりや、このことのさまよ」などの給に、(源氏・若菜上)

- (18) 「かたじけなくとも、むかしの御名残におぼしなずらへて、けどをからずもてなさせ給はばなむ、本意なる心ちすべき」(源氏・滯標)

- (19) 聞きついつゝ、すいたるゐ中人ども心かけ、消息がゐいと多かり。ゆゝしくめざましくおぼゆれば、たれも\ / 聞き入れず、「かたちなどはさてもありぬべけれど、いみじきかたわのあれば、人にもみせて尼になして、我世の限りは持たらむ」と言ひ散らしたれば、(中略) 大夫監とて、肥後の国に族広くて、かしこにつけてはおぼえあり、いきをひいかめしき兵ありけり。(中略) この姫君を聞つけて、「いみじきかたわありとも、我は見隠して持たらむ」といとねむごろに言ひかゝるを、(源氏・玉鬘)

- (20) おのこども、仰せの事をうけたまはりて申さく、「仰の事はいともたうとし。たゞし、この玉、たはやすくえ取らじを。いはむや、竜の頸の玉は、いかゞ取らむ」と申あへり。大納言の、の給。「天の使といはんものは、命を捨てても、をのが君の仰ごとをばかなへんところと思ふべけれ。この国になき、天竺・唐土の物にもあらず。此国の海山より、竜はをり上る物也。いかに思ひてか、きんぢら、難きものと申べき」おのこども申やう、「さらば、いかゞはせむ。難き事なりとも、仰せごとに従ひて、求めまからむ」と申に、(竹取)

しかし、これらの前件の事態は、発話時において成立しているものと話し手にみなされているという点においては、話し手が確認済の場合も未確認の場合も同じである。確認済の事態である(17)の前件では、夕霧と柏木が上達部という高い位にあることが示されているが、話し手である源氏にとっては二人とも自分より低い位の者である。夕霧と柏木が蹴鞠に加わろうとしない状況から、話し手である源氏は、発話時において二人の位が高いものであるとみなして、「上達部なり」と述べているのではないかと思われる。また(18)の前件「かたじけなく」は、発話時以外の話し手にとっては事実と反する可能性もある事態であることから、発話時において話し手に成立がみなされている事態だと考えられる。一方、前件が未確認の事態である(19)では、「いみじきかたわあり」ということが事実かどうかは分からなくても、その事態を成立しているものとみなさなくては、「我は見隠して持たらむ」という後件は発話できないはずである。(20)も、本当に竜の頸の玉を取ることが「難き事なり」であるかは不明だが、波線部「この玉、たは

やすくえ取らじを。いはむや、竜の頸の玉は、いかゞ取らむ」から、話し手である「おのこども」はそれを成立している事態としてみなしていると言える。

このようにトモ文には、前件の事態が未実現の仮定的な事態である場合と実現済の事実である場合がある。そして、それぞれ事態の実現性や確実性において、様々なものが見られる。しかし、話し手がその成立を発話時においてみなしうる事態が前件であるという点では、それらはすべて同じである。

ところで、先に挙げた(17)は、先行研究の分類では修辭的假定を表す例となるものである。前件の事態「上達部なり」は物理的に実現済の事実であり、そのような事態が假定によって示されていることが従来問題とされてきた。しかし、先にも述べたように、(17)は話し手による事態の捉え方においては前件が未実現の事態であるもの、つまりは一般的な逆接假定条件を表すものと同じである。また、前節において、トモの前件は後件を成立させる可能性が最も低い事態であり、それは修辭的假定でも同じであることを述べたが、そのような事態を前件として選び取っているのは話し手である。このことから、トモについて考える際に重要となるのは話し手の判断であり、前件が未実現の事態か実現済の事実かということではないと考えられる<sup>\*1)</sup>。従来問題とされてきた修辭的假定のトモは機能的にも他のトモと同じであり、特殊な用法として扱う必要はないのではないだろうか。

## 4.2 後件のモダリティ

一般に假定条件を表す文の後件は、推量、意志、命令、禁止といった未実現の事態が来るとされている。これはトモ文でも同じで、未実現の事態が後件となっている例を数多く見出すことができる。

(21) 逃げ隠れ給とも、何のたけき事かはあらむ。(源氏・玉鬘／推量)

(22) そのはじめの事、すきゝ／しくとも申侍らむ(源氏・帚木／意志)

(23) 山ながらうきはたつとも都へはいつかうち出の濱は見るべき と聞えたれば、「くるしくともゆけ」とて、(和泉／命令)

(24) 命尽きぬと聞こしめすとも、後のことおぼしいとなむな。(源氏・松風／禁止)

しかし、トモ文の後件には、未実現の事態ばかりではなく、実現済の事態や事実が来ることもある。次の(25)は、「もののはじめの六位宿世」という発話時において持続している状態が後件となっているものであり、(26)は、「さばかりに思ふを知らで隔て給しかばなんつらかりし」という実現済の事態が後件になっているものである。

(25) 「いでや、うかりける世かな。殿のおぼしの給事はさらにも聞こえず、大納言殿にもいかに聞かせ給はん。めでたくとも、もののはじめの六位宿世よ」(源氏・少女)

(26) 右近を召し出でて、のどやかなる夕暮れに物語などし給て、「なをいとなむあやしき。

などでその人と知られじとは隠い給へりしぞ。まことに海人の子なりとも、さばかりに思ふを知らで隔て給しかばなんつらかりし」とのたまへば、(源氏・夕顔)

このことについて、木下正俊(1972)は、「前件を提示しながら、それが後件に及ぼす力が弱く、後件に影響しないようなことがあると、後件末に現在態が現われ、呼応を無視するような例が出て来る」(p49)と述べている。しかし、(25)(26)のような例を「呼応を無視」しているとして例外的に扱っても良いかは疑問である。例えば(25)は、雲居雁の結婚相手となりそうな夕霧についての雲居雁の乳母の発言であり、夕霧の「めでたし」という状態から期待される事態(位が高いこと)が実現せず、「もののはじめの六位宿世」という期待に反する事態が成立していることが述べられている。この例では、後件の「もののはじめの六位宿世」という事態が最も起こり得ない状況が、前件の「めでたし」という状態であり、前件は後件を成立させる可能性が最も低い事態となっている。この例は後件ばかりではなく前件も実現済の事態であるが、トモの機能の範囲を逸脱してはいない。

先にも述べたように、トモは話し手の判断を反映した形式である。前件は話し手が発話時にその成立をみなしうる事態であり、そのような事態を前提として述べられる後件に推量、意志、命令、禁止といったモダリティ表現が多く見られることは当然と言える。トモ文の「呼応」は、トモが話し手の判断を反映した形式であるために結果的に生じたものではないだろうか。実現済の事実であっても、それがトモの機能に合致する論理関係をなせるものであれば、トモの後件に現れることができたのではないかと思われる。

## 5 トモとドモの差異

先行研究では、事実を述べる場合に用いられているトモ、つまりは修辭的仮定を表すトモと、いわゆる逆接確定条件を表すドモとの違いが問題とされてきた<sup>\*12</sup>。このことに関して、湯澤幸吉郎(1936)は、「「ども」が事實を有りのまゝにすなほに表す語に附くのと違つて、これ(執筆者注・トモのこと)は話手がその事實を譲歩的に認める場合、事實として容認はするがそれに満足しない意味を表す場合などに用ひる」と述べている。しかし、ここまで述べてきたように、トモの機能は逆接仮定条件においても修辭的仮定においても同じである。そこで本節では、トモ全般とドモにどのような機能面での差異があるかを考えることにする。

ドモ文を見てみると、前件と後件の論理関係はトモとほぼ同じであると言える。例えば(27)では、「宮司、さぶらふ人々、みな、手を分かちて求めたてまつる」という前件の事態からは、「見つかる」という事態の生起が期待される。「求めたてまつる」という行為は「宮司、さぶらふ人々、みな」という多人数で行われており、期待される事態「見つかる」が生起する可能性は極めて高いと言える。しかし、その期待に反して、「え見つけたてまつらずなりぬ」という事態が成立している。このようにドモの前件の事態は、後件の事態を成立させる可能性が最も低い事態

である。

- (27) かくて、この皇子は、(中略) 深き山へ入給ぬ。宮司、さぶらふ人々、みな、手を分かちて求めたてまつれども、御死にもやしたまひけん、え見つけたてまつらずなりぬ。

(竹取)

しかし、前件と後件の論理関係に、トモの場合は、トモ節に示された事態以外の事態、極端にはトモ節に示された事態と正反対の事態であっても後件の事態は成立する、という含意が見られたが、ドモの場合には、そのような含意は見出されない。その代わりに、ドモには前件が多回的な事態や複数的な事態、程度の甚だしい事態であるという特徴が見られる。これは言語化されていることが多く、先の(27)では「宮司、さぶらふ人々、みな」という複数の主体、次の(28)では「年ごろも」という修飾語、(29)では「よろづの物」という目的語、(30)では「制す」という述部にそれが示されている。

- (28) 「あはれと思し人のものうじして、はかなき山里に隠れるにけるを、幼き人のありしかば、年ごろも人知れず尋ね侍しかども、え聞き出ででなむ、女になるまで過ぎにけるを、おぼえぬ方よりなむ聞きつけたる時にだにとて、移ろはし侍なり」とて、

(源氏・玉鬘)

- (29) よろづの物食へども、なを五條にてありし物はめづらしうめでたかりきとおもひいでける。(大和・一七三)

- (30) かやうに、御心をたがひに慰め給ほどに、三年ばかりありて、春のはじめより、かぐや姫月のおもしろく出たるを見て、常よりも、物思ひたるさま也。ある人の、「月の顔見るは、忌むこと」と制しけれ共、ともすれば、人間にも月を見ては、いみじく泣き給ふ。(竹取)

このようにトモとドモで違いが生じてしまうのは、累加の機能を有するモが、トモでは言語化された前件以外にも想定可能な事態があることを示す働きを担い、ドモでは言語化された前件の事態が複数回あることを示す働きを担っているからであると考えられる。

また、前件の事態は、ドモは上に述べたように多回的であるが、トモは前節までに挙げた例からも明らかなように非多回的である。この違いは、前件の述部の違いとしても現れている。前件が非多回的な事態であるトモは、先にも述べたように、状態性述語の前接が多く見られる。一方、前件が多回的な事態であるドモは、トモに比べると状態性述語の前接が少ない。例えば、トモは動詞が前接する159例中、「あり」「おはします」「おはす」「侍り」という状態動詞の前接が計45例見られるが、ドモは今回対象とした作品において動詞が前接する100例中、「あり」「おはします」「おはす」の前接は全く見られず、「侍り」が1例見られるのみである。また、両形式ともに節の反復が見られるが、ドモ節の反復は(31)(32)のように、前件の動作が多回行的に行われていることを示すものであるのに対し、トモ節の反復は(33)(34)のように、「と」「かく」という副

詞を並立して全称性を示すものであって、前件の動作が多回的であることを示すものではない<sup>\*13</sup>。

- (31) かく言ひて、眺めつゝ来る間に、ゆくりなく風吹きて、漕げども／＼、後方退きに退きて、ほと／＼しくうち嵌めつべし。(土佐)
- (32) 例は暮らしがたくのみ、霞める山際をながめわび給に、暮れゆくはわびしくのみおぼしいらるゝ人にひかれたてまつりて、いとはかなう暮れぬ。まぎるゝ事なくのどけき春の日に、見れども／＼飽かず、そのことぞとおぼゆる隈なく、あい行づき、なつかしくおかしげなり。(源氏・浮舟)
- (33) 翁、答へていはく、「天下の事は、とありとも、かゝりとも、御命のあやうさこそ、大きな障りなれば、猶、仕うまつるまじきことを、まいりて申さん」(竹取)
- (34) いかに、いまは言忌し侍らじ。人、といふともかくいふとも、たゞ阿弥陀仏にたゆみなく、経をならひ侍らむ。(紫)

## 6 まとめ

以上述べてきたことをまとめると、次のようになる。

- ・トモ文には、通常の推論過程に反する事態の展開が描かれている。
- ・トモ文には、前件で言語化されている事態以外の事態（極端な場合は前件と正反対の事態）であっても後件が成立するという含意があり、言語化されている前件は、後件の事態を成立させる可能性が最も低い事態となっている。そのような含意が生じるのは、モノの有する累加の機能がトモにも受け継がれているからだと考えられる。
- ・トモの前件の事態は、話し手が発話時において、その成立をみなしうる事態である。
- ・前件が実現済の事実であるトモは、「修辭的假定」を表すものとしてその存在が問題にされてきたが、それらのトモも話し手による事態の捉え方においては他のトモと全く同じである。また、機能的にも他のトモと何ら変わるところはなく、特殊な用法として扱う必要はないものと思われる。
- ・トモ文には、前件で言語化されている事態以外の事態であっても後件が成立するという含意があるが、ドモ文にはそのような含意は見出されない。また、ドモの前件は多回的な事態であるが、トモの前件は非多回的な事態である。トモとドモにこのような違いが見られるのは、累加の機能を有するモノの働きがトモとドモでは異なるためだと考えられる。

本稿は平安初・中期の和文を対象とした共時的な研究であり、通時的なトモの機能の変遷や、後にトモと交替したとされるテモとの関係については今後の課題としたい。また、本稿ではいわゆる順接假定条件を表すとされる未然形＋バとトモとの対応関係についても考えることができなかった。これについても今後の課題としたい。

# 注

- \*1 トモと同じ機能を担う形式として接続助詞トが指摘されることもあるが、トは例が少なく、トモとの関係が明らかではない。本稿では、二形式にモの有無という形態差があることを重視し、トモとトは別の機能を担う形式として分けて考え、トモのみを対象とすることにする。
- \*2 対象とした作品におけるトモの用例数（接続詞サリトモ、カカリトモ、接続助詞トイフトモなど、他の要素と共に一語化しているものは除く。ただし、サハアリトモは一語化していないとみなし、トモの例として数えた）は以下のとおり。

竹取	伊勢	土佐	大和	蜻蛉	源氏	和泉	紫	更級	計
10	10	1	22	26	252	7	6	1	335

- \*3 松下大三郎（1928）は、「放任格」の「假定」を「未然假定」と「現然假定」に分け、「未然假定」はトモ（死すとも已まじ。）、「現然假定」はドモ（君子は身死すれども志を改めず。）が担うとしている。
- \*4 阪倉篤義（1975）では省略されているが、阪倉篤義（1993）では、「逆接」の「仮定条件」を「恒常假定」（ささ浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも／万葉・巻一31）、「必然假定」（千万の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべき／万葉・巻六972）、「偶然假定」（吾妹子が偲ひにせよと付けし紐糸になつとも我は解かじとよ／万葉・巻二〇4405）の三つに分けている。
- \*5 山口堯二（1980）の「現実假定」は、「すでに実現している」事実ばかりではなく、「やがて実現する」ことが確実な未来の事柄も条件となる点で、他の先行研究における「修辭的假定」とは異なっている。
- \*6 本稿では、トモに前接する部分を前件、前件がかかっていく部分（論理上の帰結部）を後件とする。また、トモを含む節をトモ節、トモを含む文をトモ文と呼ぶことにする。
- \*7 鎌倉喧子（1988）が上代のトモについて、「トモの機能は決して条件句を形成するものではなく、一種の独立挿入句であり、逆接假定表現をとることによる強調譬喩表現ではないかと思われる。従って、そこに述べられた事柄の成立に直接関わることはなく、一種の修飾句的な役割のものだと考えられる。」と述べているが、他の先行研究の指摘からも、上代のトモが条件句をなしていないとは考えがたい。トモ節が「独立挿入句」のように見えるのは、トモ節が成立する場合もしない場合も後件の事態が成立するというトモ文の含意によるのではないと思われる。
- \*8 山口堯二（1980）は、「こういう、いわば全称的意味をもつ条件句のあり方が見られるのも、逆接の假定条件句がもともと包括的な条件下に帰結の成立を保証する意味あいをそなえているためと見てよい」（p94）と述べているが、トモ文の「包括的な条件下に帰結の成立を保証する意味あい」はモによって生じているものであり、全称性とモという形態の担う働

きとを積極的に関連づけても良いのではないと思われる。

- \*9 終止形と連体形の合一化に伴い、院政・鎌倉時代以降、動詞の連体形に接続する例も見られる。また、上一段活用動詞「見る」には奈良時代は「見」の形に接続するが、この「見」の活用形には連用形や原始的な終止形など、諸説が出されている。
- \*10 先行研究では、鎌倉時代以降、推量の助動詞ム・ウ・ヨウや打消推量の助動詞マイにもトモが接続すると指摘されている。
- \*11 使用される文体から見ても、トモが話し手の判断を反映していることは明らかである。次の表は使用文体別に今回対象とした作品における用例数を示したものであるが、散文における用例は会話文と心中文に集中していることが分かる。地の文の例が25例あるが、これらも日記で作者が感想を述べている部分の例や、物語で作者が顔を出した草子の部分の例など、話し手の判断を反映しているものが多い。

地の文	心中文	会話文	手紙	歌	計
25	70	161	2	77	335

- \*12 いわゆる逆接確定条件を表す形式にはドもあり、ドとドモは同じ機能を担うと説明されることが多いが、本稿ではドとドモは異なった機能を持つものとして考える（参照、江原由美子（2001））。
- \*13 今回調査した範囲では、次の1例のみに「見るとも\／」という同一句の反復が見られたが、河内本系御物本や別本系保坂本では単に「みるとも」であり、青表紙本系池田本では「見るとも\／」がすべてないことから、トモ節が反復している確例とはし難い。また、この例には、「見るとも\／」以外にも多回性を表す語として「返々」があるが、現代語で「繰り返し見ても見ても飽きない」は若干不自然である（「見ても見ても飽きない」や「繰り返し見ても飽きない」は自然）ことからトモ節の反復には疑問が残る。

「御心ちよろしく見え給はば、やがてまかでなん。猶、苦しくし給はば、こよひは宿直にぞ。今は一夜を隔つるもおぼつかなきこそ苦しけれ」とて、しばし慰めあそばして、出で給ぬるさまの、返々見るとも\／飽くまじくにはほひやかにおかしければ、出給ぬるなごりさう\／しくぞながめらるゝ。(源氏・東屋)

#### 使用テキスト

(万葉)『万葉集』…〈本文〉『万葉集本文篇』塙書房、〈訓読文〉伊藤博校注『万葉集上巻』『同下巻』角川文庫／(竹取)『竹取物語』、(古今)『古今和歌集』、(伊勢)『伊勢物語』、(土佐)『土佐日記』、(蜻蛉)『蜻蛉日記』、(源氏)『源氏物語』、(紫)『紫式部日記』、(更級)『更級日記』…以上、岩波書店新日本古典文学大系／(大和)『大和物語』、(和泉)『和泉式部日記』…以上、岩波書店日本古典文学大系

## 参考文献

- 阿部八郎（1985）「助詞総覧 2 接続助詞」『研究資料日本文法第7巻 助辞編（三）助詞・助動詞辞典』鈴木一彦・林巨樹編、明治書院
- 糸井通浩（2001）「と」「とも」『日本文法大辞典』山口明穂・秋本守英編、明治書院
- 江原由美子（2001）「平安初期和文における接続助詞ト・ドモの機能」『岡大國文論稿』29
- 鎌倉喧子（1988）「上代におけるいわゆる接続助詞トモについて」『香椎潟』34
- 木之下正雄（1943）「假定條件法について」『国語国文』13-5
- 木下正俊（1972）『万葉集語法の研究』塙書房
- 此島正年（1966）『国語助詞の研究—助詞史の素描—』桜楓社
- 小林賢次（1996）『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 佐伯梅友（1936）「淀むとも」考『奈良文化』30（佐伯梅友（1938）『万葉語研究』文学社、（1963）友朋堂再刊、所収）
- 阪倉篤義（1975）『文章と表現』角川書店
- 阪倉篤義（1993）『日本語表現の流れ 岩波セミナーブックス45』岩波書店
- 坂原茂（1985）『日常言語の推論』東京大学出版会
- 鈴木泰（1999）『改訂版古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析—』ひつじ書房
- 田中重太郎（1966）「逆接假定条件を示す接続助詞「と」の用例について」『明日香』31-9
- 塚原鉄雄（1958）「接続助詞—ば・ど・ども・とも・と・て・つつ・で・を・に・が—」『国文学解釈と鑑賞』23-4
- 塚原鉄雄（1967）「〈接続助詞 古典語〉とも」『国文学解釈と教材の研究』12-2
- 西田直敏（1971）「とも」『日本文法大辞典』松村明編、明治書院
- 林巨樹（1959）「『とも』の研究」『国文学解釈と教材の研究』4-9
- 飛田良文（1970）「ば・と・とも・ど・ども・も〈ても〉〈けれども〉〈ところが〉〈ところで〉」『国文学解釈と鑑賞』35-13
- 細川英雄（1985）「助詞総覧 4 係助詞」『研究資料日本文法第7巻 助辞編（三）助詞・助動詞辞典』鈴木一彦・林巨樹編、明治書院
- 松下大三郎（1928）『改撰標準日本文法』紀元社（訂正版、（1930）中文館）
- 山口明穂（1971）「と」『日本文法大辞典』松村明編、明治書院
- 山口堯二（1980）『古代接続法の研究』明治書院
- 山口堯二（1996）『日本語接続法史論』和泉書院
- 湯澤幸吉郎（1936）「接続助詞「とも」「ど（も）」の用法」『国語解釈』1-4（湯澤幸吉郎（1940）『国語学論考』八雲書林、所収）